2019.3
vol.214

耳をすます

学校長　飯山　等

講堂「樹心閣」の解体工事が、144年目の創立記念日(2018年10月1日)を刻したその翌日から始まりました。大型重機が50余年刻まれてきた時の終わりを容赦なく告げていきます。見ていて、「校舎が新しく整備されるということは複雑です」と言った卒業生の言葉も思い出されて、何かとてもいけないことをしているようで、胸が苦しくなってきました。歴史を更新するという覚悟をしっかりと持つこと、その厳しく重い責任を感じたことです。講堂は創立90年の記念事業として1964年に建設されました。新しい器の誕生が、教員そして生徒それぞれに新しい気持ちを誕生させることになったのでしょう。講堂礼拝、そしてその記録である『樹心集』が生まれました。現在でこそ、このような独立した目的のために、それに相応しい形態を持つ講堂やホールを備える中学高等学校も珍しくないことですが、当時においては希有なことであり、大いに瞠目されることであったと推量されます。そして、その決断は決して意気軒昂たる信念が形を取ったのではなく、「本校にとりましては、講堂は仏殿であり、また、真実の教法を聞思する場所でもあります。そういう意義を持つ場所が、そのまま体育の場であってはいけないということではありませぬが、ただ私たちの指導力の未熟さと、生徒たちの年齢の若さとが、動と静の両極端に立つような教育目標を、同一場所で、鮮やかに切り替えながら、果たし得るかどうかに不安を持ったからであります」との、当時の広小路亨校長先生の述懐に窺えるように、自らと生徒の現実を謙虚に観取する柔らかな心が形を成したものであったのです。新しく建てられるのは、バスケットボールコート3面の広さを持つ体育施設と、1学年規模を収容する講堂を一棟に収める大きなものです。そこに在ることが、威容を誇るだけの伽藍であってはなりません。どのような場としてはたらき、どのような生活を開き、どのような大谷が創成されることになるのか、ひとえにその未来は私たちに托されています。

現実が大きな音を立てて動いています。事態がそれへの対応を強く求めてきます。「忙しい」「慌ただしい」という言葉が脳裏に明滅します。現実への即応の積み重ねが、いつしか「心を亡くす」「心が荒れる」事態を引き寄せてはいないかと自身に迫ってきます。振り返ればそのようなとき、自らの内に向かって静かに沈潜する時を求めて、いつも自然に好きな詩人の本を手に取っているのです。

今回は谷川俊太郎『聴くと聞こえる』(創元社)。ゆっくり、ゆっくりと読み進みます。一篇を、一語をゆっくりと味わいます。そのなかの『音楽』と題された一篇、「穏やかに頷いて／アンダンテが終わる／二つの和音はつかの間の訪問者／意味の届かない遠方から来て／またそこへ帰って行く／／幻のようにか細い糸の端で／蜘蛛が風に揺れている／それを見つめているうちに／フィナーレが始まる／最後の静けさを先取りして／／考えていたことが／時の洞窟に吸いこまれ／人はなすすべもなく生きている／せせらぎのように清らかに／世界を愛して」。さらに数頁後の一篇『音楽ふたたび』の後半、「初めての音はいつ生まれたのか／真空の宇宙のただ中に／なにものかからの暗号のように／ひそかに謎めいて／／どんな天才も音楽を創りはしなかった／彼らはただ意味に耳をふさぎ／太古からつづく静けさに／つつましく耳をすましただけだ」。

大谷中・高等学校　京都市東山区今熊野池田町12　TEL：(075)541-1312　http://www.otani.ed.jp　編集兼発行責任 宗教教育センター　乾 文雄